

『相性』（東京大学公開講座72）東京大学出版会、  
2001年、pp.33-50.

---

---

詩人とその妻—光太郎／智恵子・光晴／三千代

今橋映子

---

---

1 はじめに—詩人とその妻

古来「ミューズ」と言えば、(大概は男性の) 芸術家に詩的啓示を与える「女性」のことを指すが、詩人にとって妻がそのような存在であることは珍しくない。奇しくも、光太郎、光晴の両詩人が敬愛し、その翻訳を試みたベルギーの詩人、エミール・ヴェラーランにとって、妻マルトは、正に詩人の精神的危機を救い、豊饒な詩作を産み出す原動力であった。

長い間私のくるしんでゐた時、

時間が皆私にとって係躰わなであつた時、

あなたは冬、窓にさし、

夕暮の底、雪の上にひかる  
あの心うれしい光のやうに私に見えた。

(ヴェララーン「明るい時」十一、光太郎訳、18 296) [数字は全集巻数頁]

詩人にとって妻は、詩想の源泉であると共に、詩の題材そのものでもある。とすれば、〈詩人〉と〈妻〉との「相性」は理想的——と思いたいところなのだが、実はそれほど単純なものではないらしい。特にその妻が、単なる「ミューズ」であることから一步踏み出し、自己表現を求め始めた時には――。

今回は、高村光太郎(一八八三—一九五〇)と金子光晴(一八九五—一九七五)という、私たちにきわめてなじみ深い、日本の近代詩人を取り上げ、妻・長沼智恵子(一八八六—一九三八)と森三千代(一九〇五—一九七七)に光を当ててみたい。

二人の詩人たちの作品に、各々表象された〈妻〉の像と、時代の中に生きた彼女たちの姿との「ずれ」——それを浮かび上がらせることによって、詩人とその妻(あるいはミューズとしての女)との「相性」とは何かを、探っていきたいと思う。

## 2 光太郎／智恵子——女性画家の自立と狂気

『智恵子抄』(二九四二)という詩集で、すでに良く知られた智恵子という一人の女性。しかしその詳細な生涯が、詩人の妻としてではなく、長沼智恵子(図1)という芸術家として検討されるようになったのは、最近のことである。

智恵子は、福島の酒屋の「長女」として生まれ、東京の日本女子大学を卒業後、一転して洋画家の道を目指した。いわば時代の最先端をゆく女性であった。明治時代に油絵という領分で自立した女性画家は、実際には数えるほどしかない。一八七六年に創設された工部美術学校の第一期生、山下りんとラギーザ玉が、その代表的先駆者だが、わずか六年で閉鎖された工部美術学校の後、東京美術学校では、女性の入学が実に一九四六年まで許可されることはなかった。一九〇〇年に東京に設立された女子美術学校についても、当時の新聞が「所詮裁縫学校」に過ぎないと揶揄する始末である。

智恵子は、いわば私塾にあたる太平洋洋画会研究所に通い、女性解放運動の雑誌『青踏』に表紙絵(一九一一)(図2)を描き、誰よりもセザンヌのよ  
うな色彩を目指した画家であったという。

同時代、「洋画」の本家、ヨーロッパにおいても、女性画家の地位は実はさして変わらなかった。例えばパリの国立美術学校でも、女性の入学が許可されたのは一八九七(明治三〇)年のことであり、女性は「花」や「静物」など、西洋アカデミズムでは階



図1 長沼智恵子(明治45年、27歳)  
高村規氏提供



図2 長沼智恵子「『青』」  
創刊号表紙絵(明治  
44年9月)  
高村 規氏提供

られた「帝都復興に関するアンケート」に智恵子は次のような文章を寄せている。

眼をあげて高き者への、趣味と憧憬とその不撓の力とをもって、石をとれ、岩石を彫刻せよ。  
剛堅にしてしかも温かい生命を蔵する石材によって、焼け失せ蝕まぬわが首都の衣裳となさしめよ。そして山嶽の威風と優美と、森林の荘厳と下草の軽快と、大洋の自由と勢力とを理想せよ。

(高村智恵子「建設の根源は此処に在り」『高村光太郎資料』第六巻所収)

一方光太郎は、アメリカ/ロンドン/パリと巡った外遊(一九〇六—一九〇九)の後、日本や自分の芸術の方向に絶望し、自暴自棄のデカダンス生活の中で智恵子と知り合う。正にヴェラランにとつてのマルトのごとく、智恵子は光太郎の生活と詩作に光をもたらした。二人の結婚直後、収入のあて

の全く無い時代に、光太郎が智恵子のために訳した、ヴェララン詩集『明るい時』に、彼が自分たち夫妻の軌跡と結婚の喜びそのものを、「故意に」重ね合わせてしまったことは、従来の研究で指摘されてきた。光太郎はヴェラランの評伝(一九一九)の中で、「夫人マルトに対する彼の敬愛は殆ど礼拝の域にまで達する。彼はあの恐ろしい心身の危機に際して此の善き女性に救はれた事を終生忘れなかった。夫人は絵を描き、アトリエまで持っていた程であった(……)」(8—221)と述べているが、それはまたそのまま、彼自身の告白とも取れる一文なのである。

しかしすぐれた芸術批評家でもあった光太郎はその一方で、セザンヌの色彩を求めて苦闘する画家・智恵子の洋画作品(図3)を、妻とはいえ高く評価することがついにできず、彼女もまたそれによって苦しんでいった。智恵子の晩年の狂気に関しては、明治の家父長制下に、実家の破産を契機に長女として背負った重荷など、様々な因子が関わっていたと言われる。そしてその因子の一つとして、芸術家同士の夫婦の「相性」とその悲劇もまた、明瞭に見てとることができらるだろう。むしろ智恵子が心の病を得た後に遺した、千数百点に及ぶ紙

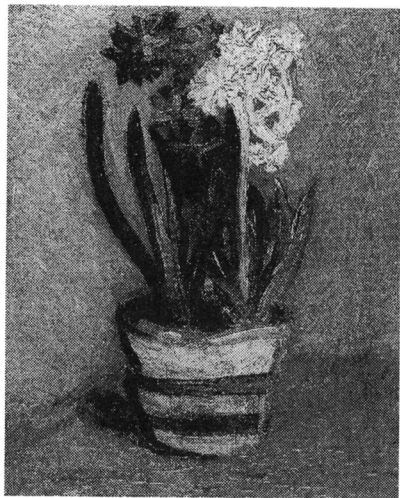


図3 長沼智恵子「花(ヒヤシンス)」油彩  
27.1×27.3cm 大正初期  
二本松市教育委員会蔵

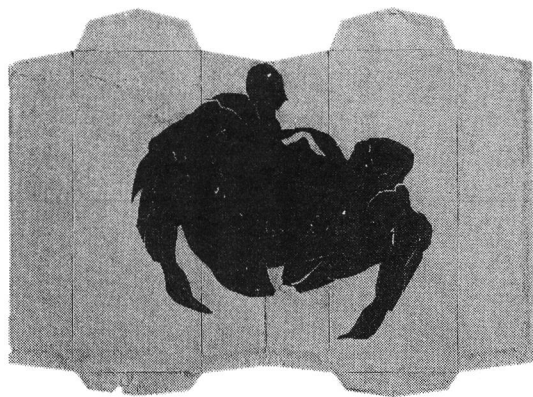


図4a 長沼智恵子「カニ」紙絵、25.5×34.8 cm  
高村 規氏提供

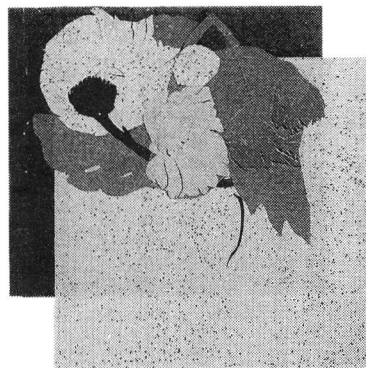


図4b 長沼智恵子「花と花瓶」紙絵、28.2×27.8 cm  
高村 規氏提供

絵(図4a、b)の中にこそ、色彩と繊細な造形についての「天賦の才」が発揮されるのを見る時、私たちは何とも切ない気持ちになる。そして考えてみれば、油彩画という西洋アカデミズム伝統の技術と美学の中で自由になれず、凡庸に終わった智恵子は、「紙絵」という、西洋的絵画芸術の範疇外の世界に出た時に初めて、皮肉にもその才能を開花させたのであった。

### 3 智恵子Ⅱかぐや姫伝説

ところで今日、長沼智恵子という女性画家の執筆作品や絵画で残されたものは、光太郎に比べれば圧倒的に少ない。智恵子は、彼女の声や作品以上に、『智恵子抄』をはじめとする光太郎作品の中の〈智恵子〉として、表象され、解釈され続けてきたのである。「人間商売さりとやめて/もう天然の向こうへ行つてしまった」智恵子。「あどけない空の話」をする智恵子。「ちい、ちい、ちい、ちい」と千鳥を呼ぶ智恵子……。『智恵子抄』にあらわれる彼女の姿は、「建設の根源は此処に在り」と晴れやかに書き綴った、あの女性画家とはあまりに違う。

吉本隆明氏をはじめとする論者によって、闘病中の智恵子の実際の病状が、絶え間ない独言、徘徊、暴力暴言などを伴う凄絶なものであって、『智恵子抄』の詩世界をいかに裏切る現実であったのが、すでに資料的に裏付けられてきた。一方主にフェミニズムの観点からも、こうした光太郎／智恵子の夫婦の危機が、分析されている。それは光太郎側の過剰の思い入れのみならず、自己拡大の衝動を生身の男性の上に転位してしまった、智恵子自身の自己欺瞞、結婚によって過去を全て破棄し、社会的人間関係からの完全分離を図ってしまった智恵子の時代的限界からも説明されている。そうした分析をふまえた上で、なおも『智恵子抄』が、詩人とその妻の「虚偽ではない」、愛の詩集と「読まれ」続けた理由はどこにあるのだろうか――。

それに一つの仮説を与えるならば、私は『智恵子抄』あるいは光太郎の造型した〈智恵子〉像が、実は日本に古来からある〈天人女房譚〉を、内包しているからではないか、と考えている。

『智恵子抄』において、心の病を得た彼女が、何か「小さき人」か「童女」のように表象されるのは先に見た通りである。光太郎は一九四〇年に発表した「智恵子の半生」というまとまった追悼文中で、これを補足するかのようになり、彼女の前半生を自分は全く知らなかったし、「年齢さえ実は後年まで確実に知らなかった」（＝実際は三歳年下）と書いていたのである。

天からふと降りてきた童女のかぐや姫が、成長したのちある満月の晩にお迎えが来て、「天の羽衣」を羽織って、あの世に帰ってしまう——という物語。「かぐや姫」は、東アジアに広く流布する天人女房譚（白鳥処女説話）の一つである。天の羽衣を着るとこの世の人とは「心異に」<sup>こころよ</sup>なってしまう。かぐや姫は、「人間商売さりとやめて」、夫と通じる言葉をもたない智恵子とそのまま重なる。それに気づいて「智恵子の半生」を読み返してみると、驚くほど一致する表現が次々と見出されるのである。光太郎にとって彼女は「心に何か天上的なものをいつでも湛えて居り」、「何だか彼女は仮にこの世に存在している魂のやうに思える事があった」と述懐する。さらに次のような一節はどうだろう。

さういふ幾箇月の苦闘（＝智恵子の没後、制作欲が全く無くなったということ）の後、或る偶然の事から満月の夜に、智恵子はその個的存在を失ふ事によつて却て私にとつては普遍的存在となつたのである事を痛感し、それ以来智恵子の息吹を常に身近かに感ずる事が出来、言はば彼女は私

と借にある者となり、私にとつての永遠なるものであるといふ実感の方が強くなった。

（9—194—195、（一）内および傍点引用者）

天上より降りてきた妻が、自分の危機を救って光明をもたらしたものの、ある日「羽衣」を着たかのように人間の声を解しない存在となり、天に再び昇っていってしまうという物語。東アジアに千年以上も生き続ける伝説を詩人はおそらく無意識のうちに、その詩集の中に封印したらしい。『智恵子抄』の中の詩「荒涼たる帰宅」は次のように結ばれている。

（……）

夜が明けたり日がくれたりして

そこら中がにぎやかになり、

家の中は花にうづまり、

何処か葬式のやうになり、

いつのまにか智恵子が居なくなる。

私は誰も居ない暗いアトリエにただ立つてゐる。

外は名月といふ月夜らしい。

（光太郎「荒涼たる帰宅」2—326—327）

## 4 光晴／三千代——愛の確執

爪楊枝の先でせせては

丹波ほづきの種をもみながら

女は、言ふ

——あたいを好きと言つて。

男の吸つてるたばこをとつて

一くち吸つて、もどしてから

女は、言ふ。

——ねえ。言ふだけでいいんだからさ。

ほほづきの種が大きいので

むづかしさうに眉根をよせて

女は、言ふ。

——水と木は、相性がわるいかしら。

種がやつと出たほづきを

きゅつと鳴らして

女は、言ふ。

——どうだつていいやね。そんなことは。

(金子光晴「愛情16」「愛情69」4-350-351)

すでに広く知られるように、金子光晴は男女の愛の機微を生涯にわたって描き尽した詩人である。「愛情16」は『愛情69』という詩集に収められた一編で、ここで光晴は男女の愛のあらゆる局面を69(ソワサント・ヌッフ・フランス語の隠語、男女の合体のこと)という意味深長な数の詩編で織り上げていく。有名な「洗面器」を含む詩集『女たちのエレジー』と同様、光晴はことさら〈女〉を精霊化することも、眨めることもなく、愛、倦怠、憎しみ、未練など微妙な陰影を描き込む。その「ふたり」の関係も恋人や夫婦と限らない、ゆきずりの恋、不倫、匿名のお嬢さんに語りかける詩、古典世界に事寄せる技巧——と、実に多種多様である。

それでありながら金子光晴は一方で、時代への徹底的な反骨精神を持ち続け、ニヒルなまでの自我意識と、〈放浪〉の精神に支えられている。このダイナミズムの中でこそ、彼の詩世界は、独自の光彩を放っていると言えるだろう。



図5 森三千代（昭和10年頃）  
森登子氏提供

〈女〉を語ってやまない光晴は、意外なことに妻・三千代の姿を、直接的に詩の中にとんと遺していない。むしろ彼は、妻との複雑な人生の行程を、最晩年自伝的小説の中心モチーフにして、その稀有な散文を成立させたと断言して良い。すでに光太郎の章で見た通り、もとより文学テクストの中の〈妻〉は、彼女本人の声や思想を奪われて、「書かれた女」であることは疑いようもない。しかし戦中

戦後、自ら作家となって「書く側」に回ろうとした妻・三千代は、現実の中で絶えず不確定、不安定な夫妻関係を夫・光晴に突きつけることによって、〈妻〉の像の神話化を免れているように見える。

森三千代（図5）は、東京女子高等師範学校（現在の御茶の水女子大学）時代に十歳年上の金子光晴と知り合い、妊娠に気付いて三年生で中退、結婚生活をスタートさせた。厳格な教師の家に生まれ育った三千代の選択は、当時であればなおさら破天荒なものだったろうが、早くから詩歌雑誌の活動に参加し、文壇の動向に敏感だった三千代は、一九二〇年代の「モガ」の典型的な女性であったようだ。実際光晴と知り合い、結婚する決意を固めた後も、彼女は詩人吉田一穂との恋を捨てきれずにいた。光晴が三千代と知り合ったのは、関東大震災後、東京から流浪し続け、耽美派詩人からの転向を迫っていた辛い時期で、その意味では光太郎同様、「救いの光」であったには違いなかった。しかしその時すでに彼女の心が、もう一人の男性との間で揺れ動いているという状況の中で、光晴の詩は光太

郎と、必然的に別の陰影を帯びることになる。

泥んこのなかから、俺は

ガラスのかけらをさがし出した。

ガラスではない。それは、

うちあげた花火のかけらだ。

泥んこのなかで、俺は、

そのひとの膝小僧にふれた。

その膝小僧ひとつでも、

ずるぶん、抱きこたえがある。

泥んこをぬけ出られない俺は、

膝小僧を抱いて眠るほかない。

（光晴「日記一束」15—334）

おそらく東北への新婚旅行中（一九二四年七月）に書かれたと思われる「日記一束」は、右のような詩と散文で交互に綴られた、特異な私たちの旅行日誌であり、あきらかに公表することを目的とした「作品」である。この中に、すでに私たちは、実に半世紀の後、光晴最晩年の散文作品にまで通底す

るテーマ——妻への愛の執着と、個の絶対的孤独のジレンマ——を、見出すことができる。

ことさらに彼女を愛したいというつよい欲望はない。まして、愛されたいというナルシズムはない。ただ、私のころのなかでなにかで償われないという不当なぞみがあるだけだ。男全体が、女全体に求める、なにかの返済で、永遠にみたされない境界を我意にあいてに押しつけることは、真実、迷惑至極なことに相違ない。(……) 私がひとりなように、彼女もひとりだ。どんな愛執も、ふたりの孤独をなぐさめはしない。

(光晴「日記一束」15—348)

お互いの「自由な」恋愛を受け容れ、拘束されない関係が続けようという当初のもくろみが、妊娠—出産—極貧の新婚生活という現実によって、早くも崩壊したことは言うまでもない。詩壇の動きがプロレタリア運動全盛になっていく中、その時流に乗ることを潔しとせず、反骨精神から沈黙を守る夫に対し、社会主義運動に深く興味をもっていた森三千代は、深く失望したという証言が残っている。それにしては経済的にもただ風まかせ、彼女を一人置いて上海旅行を決定した光晴の留守中、三千代はアナキストの美術史家土方定一と不倫の関係に陥る。

一九二八—三二年に、アジア／ヨーロッパを巡った光晴・三千代の外遊は、こうした危機的状况を救うために、いわば唐突に決行されたのだった(詳細は、後出拙著を参照)。金子光晴はその第二回渡

欧の全貌を、四十年もの歳月を経てその最晩年、『どくろ杯』『ねむれ巴里』『西ひがし』という自伝三部作に結晶させた。特にその第二部『ねむれ巴里』は、「私」と、「三千代」との愛の確執とその軌跡を縦軸に、パリのどん底生活と放浪、越境の精神を横軸に据えた精妙極まりない小説である。

光晴が、「仇花の都」と揶揄するパリにおいて観察するのは「シャンジュ・シュバリエ」の土地柄である。それはパーティーの踊りの途中の掛声で、即座に踊りの相手を変えること。つまり「自由恋愛」のことなのであるが、それが現実のものとして起っているこの異邦において、光晴は「昨日は他人のこと、明日はわが身と、心を寒く」する。

彼女に対する愛情の変化というようになちよろいことではなかった。澱んだ水が、しらぬまにどこかへうごきだしている感じであった。(……) あまりにも自由なパリぐらしが滲みついてきて、眼にみえない縛縄がばらばらとちぎれてゆき、頑なモラルでしぼられていた女が、当然の権利をつかもうとして、他の男のふところに飛びこみ、さてこそ、パリに来てクープル(「カップル」)の組み替えが多いのだという確証が、僕にも実感としてつかめてきた。

(光晴「ねむれ巴里」7—87—88)

すでに「日記一束」で見たような、自由な恋愛関係を受け容れようとする「明晰さ」は、このパリ時代にもある。しかし光晴の実人生と小説は、その明晰さをつねに裏切り続けたようである。小説中、



娘の外遊を気づかった三千代の父が、日本から彼女のために、帰国旅費を送金してくるくんだりがある。「僕」は偶然にもその通知を彼女の不在時に受け取り、その「大金」を勝手に換金して使い込んでしまふ。せめてもの罪滅ぼしに、彼女のためにも洋服やらレストランの食事やら、次々とサービスする夫の言動——それについて意外にも何も追及しない自由奔放な妻の姿が、小説中にはある。

新装になった彼女は、それ以上に、積年の仇討ちを終わったように歩いているのがもどかしく、時々、跳ね上りながら先に立ってあるいた。そして、どこから金が湧出して、どうしてその金も僕がもっているのか、ふしぎがったり、想像したりする筈のところを、眼の前の華やかさにまぎれて、よほど後廻しになるところが彼女であった。

(光晴『ねむれ巴里』7—21)

後年森三千代はあるインタビューの中で、この件について、最初から「ピンと来て」、今さら責めでも仕方がないし、「なんとかしてもう、別れたいと心の中では思っていました」と、語っている。「ねむれ巴里」の中の〈妻〉の姿が、底抜けに自由な、世離れた女の姿として、一方的に詩人の側からやはり造型されているのは、ここでも明らかだろう。

『ねむれ巴里』では結局表面化しない夫妻の感情的葛藤の有様は、つい先年公刊された(未刊の手記)『フランドル遊記』の中にも読むことができる。ついにパリで食いつめて、ベルギーの知人を頼

って行った彼らは、ビールセル城という荒れた古城で言い合いになる。三千代は彼に、レースのドレス一つ買えないあなたは、自分の不倫相手と戦おうにも「砲弾が不足している」、「私の若い日はどうなる」と激しく問い詰めるのである。しかし「私」は、「彼女の、靴下と猿又のあいだからくびれ出た、貝釘かいがねのように眩耀クラクラする肉に、接吻くちづけ」せずにはいられない——。

\*

詩人とその〈妻〉の関係は、このように多様な感情のもつれや局面を示し続ける。そしてその妻が、特に自己の表現を求め始めた時、詩人に表象された女の姿は、「現実」をつねに裏切り続け、しかもだからこそ「詩」を成立させていることに気づくだろう。そしておそらく今後は、詩人の陰に隠れがちな女性たちの人生と仕事に、今一度光を当て直すことによって、明らかに時代的限界を示しながらも、個別の光を放とうとする彼女たちの意志を再発見するに違いない。

#### 引用および主要参考文献

高村光太郎関係

『高村光太郎全集』筑摩書房、一九七六年(本文引用後に巻数頁数の順で示す)

- 『高村光太郎資料』第六卷、文治堂書店、一九七七年  
 『高村光太郎・智恵子——その造形世界』展カタログ、三重県立美術館、一九九〇年  
 吉本隆明『高村光太郎〈増補決定版〉』春秋社、一九七〇年  
 平川祐弘『西洋の詩、東洋の詩』河出書房新社、一九八六年  
 駒沢喜美『高村光太郎のフェミニズム』朝日文庫、一九九二年  
 今橋映子『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房、一九九三年／平凡社ライブラリー、二〇〇一年  
 小嶋菜温子『かぐや姫幻想——皇権と禁忌』森話社、一九九五年

#### 金子光晴関係

- 『金子光晴全集』中央公論社、一九七五年（本文引用後に巻数・頁数の順で示す）  
 金子光晴『フランドル遊記』平凡社、一九九四年  
 森三千代『金子光晴の周辺1-15』（インタヴュー／聞き手・松本亮）前掲全集月報所載。  
 今橋映子編著『金子光晴 旅の形象——アジア・ヨーロッパ放浪の画集』平凡社、一九九七年  
 今橋映子『パリ・貧困と街路の詩字——一九三〇年代外国人芸術家たち』都市出版、一九九八年

これをもって閉講のあいさつといたします。どうもありがとうございました。

東京大学副学長（大学院農学生命科学研究科教授）

二〇〇〇年五月二〇日

東京大学公開講座 72

# 相性

二〇〇一年一月三〇日 初版

編 集 財団法人東京大学総合研究会

理事長 蓮實重彦

発行者 河野通方

発行所 財団法人東京大学出版会

二二八番 東京都文京区本郷七丁目三番一号 東大構内

電話 〇三―三八一―八八一四

振替 〇〇一六〇―六一五九九六四

印刷 株式会社 理想社

製本 株式会社 島崎製本

© 2001 Shigetiko Hasumi

ISBN 4-13-003102-3

℞〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇―一三三八）にご連絡ください。

# 相性

逸身喜一郎 相性・そして恋心

今橋映子 詩人とその妻

近藤邦夫 教師と子どもとの相性

高橋伸夫 ぬるま湯的体質に見る人と会社の相性

杉山雄一 葉と人の相性

幕内雅敏 臓器移植と相性

古田公人 スギと日本人

松本聡 土と作物の相性

舘 障 相性のよい人工物を求めて

西原 寛 異なる物質間の相性